１．ベルベルト・ブレヒト作『ガリレイの生涯』におけるガリレイの行動を異端審問官の立場から批判せよ。

ガリレイは現在の社会の秩序を壊そうとしている。現在の社会はキリスト教があるから成り立っているのに、そのキリスト教の根幹を揺るがす『地動説』の発表するガリレイは社会を壊そうとしているのと同義である。『地動説』は聖書を否定することだ。我々人類が住む星こそ宇宙の中心、それが違うというのなら、聖書を作られた神が間違っていたということになる。神を否定する説を唱えるなんてガリレオは異端だ。ガリレイが純粋に研究をして、『地動説』がその研究の結果でも、それを公に発表してはならない。たとえそれが真実であってもだ。それによって教会の力が失われ、社会の秩序が乱れるからだ。また、ガリレイは誰にでも理性は存在していると言うが、ガリレイ個人が理性は誰にでも存在すると思うのはよい。だが、もしそれを人々に吹き込んですべての人々が理性によって行動したら、必ず国主や教会に対して疑問を持つものが出てくる。そうなると社会は混乱してしまう。例え教会が科学的に間違った考えを持っていても、それで社会が成り立っているのであればいいのだ。社会が成り立つにはキリスト教が必要なのだ。教会が必要なのだ。教会が人々を導いてやるのが一番なのだ。今までそれで社会が成り立ってきたのに、急に人々に理性だと言っても人々は間違った考えを持つだけだ。社会を混乱させてでも、理性を持つことは大事なのだろうか。ガリレイの行動は、自分の考えを正しいと思い込み実行しているだけに過ぎない。ガリレイの考え方はある意味良いのかもしれないが、現在成り立っている秩序を壊してまで行うことではないのだ。

２．ルネ・デカルト『方法序説』にある有名な「哲学の第一原理」、＜わたしは考える、ゆえにわたしは存在する＞に見られる理性の役割と、カントの『啓蒙とは何か』における理性の役割について、共通するところと異なるところを説明せよ。

　デカルトは教会で学問を学んだが、不満だった。なぜなら人文学などは過去のものであり、現在役に立つものではなかったからだ。そしてデカルトは数学の上に論理的な学問を気付こうと思った。数学なら個人の考えによって左右されないためである。それまでの学問は習慣や伝統に基づくもので、あまり論理的ではなかった。デカルトはまず習慣や伝統を疑い、自らの理性に従うことこそが大事であると考えた。そして人々の考えが違うのは、考える過程が違うだけであり、個人の理性の違いで生じているわけではないと考えた。デカルトの＜わたしは考える、ゆえにわたしは存在する＞は、哲学の第一原理とおいた。全てを疑った結果、疑っている自分だけは確実に存在していると考えたためである。デカルトは哲学とは疑うこと、何でも疑ってかかることが哲学だとした。そして分からない事でも考えていれば、必ず分かると主張した。デカルトは、神が材料を集めそれに法則を与えて世界を想像したと考えた。そしてその法則を知ることで神の素晴らしさを知ろうとした。また、人間には肉体とは別に精神が存在するとする二元論を唱えた。そして、考えても考えても分からないことだけを神のやっていることとした。デカルトの時代は、今まで常識だった伝統や習慣を破り、世界を変える時代であった。その中で理性は、個人が自分の考えを持ち、真実を知る役割を持っていた。

　カントは、理性は誰でも持っているが使わないだけであると考えた。そして、自ら理性を持ち考えることこそ啓蒙だとした。啓蒙とは、精神を覆っている暗い間違いや愚かさを除く光という意味だ。ではなぜ人々は理性を使わないのか、それは自分で考えないことが楽だからだとカントは考えた。自ら考え行動することは勇気がいる。理性を使い始めると、初めは間違いを起こす。それはたいしたことではないのだが、周りの人々はそれを見て理性を使うことを放棄する。放って置くと人々は他人に決められた伝統や習慣に則って理性を使わなくなる。ではどのように理性を使わせるか。カントはこの問題に対し、理性を自由に使えるような状況にすれば良いと考えた。そして多くの人が議論しないと間違いは正せないと考えた。またカントの考え方には、理論的理性よりも実践的理性の方が優位にあり、人間はどのような生き方をすればよいのかという道徳問題を哲学の中心に据えていた。人々の理性によってこそ、すべての人間が互いに他を人格として尊重する道徳的な心構えをもち、平和の実現にむけて努力することができると考えていた。そして人間性の根本には啓蒙があると考えていた。

　デカルトとカントの理性に共通する部分は、理性は誰にでもあると考えていることである。そして理性とは自らが考える事であるということは共通している。どちらも理性を使うことを推奨している。しかし、デカルトは考え方の違いは理性の違いではなく過程の違いとしているが、カントは理性を使っても必ずしも正しい答えが導かれるとはしておらず、議論することで正しい答えを見つけるとしている。また、デカルトは理性を世界の法則を知るための役割を持たせていたが、カントは啓蒙時代と呼ばれた時代だけあって、どちらかというと社会において人々が理性を使って行動することで社会を変える役割を持たせていたと考える。デカルトの理性は論理的に考える能力、伝統や習慣に左右されない真実としている。カントの理性は誰にでもある考える能力、それが真実とは限らないが、互いに考え議論することにより正しくなるとしている。